



■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ 特別寄稿 ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

6/28(水)の芸術鑑賞では、劇団四季『オペラ座の怪人』を観劇します。そこで、生野高校で『オペラ座の怪人』といえばこの方！という英語科のA先生に、鑑賞にあたって知っておきたい作品の背景について寄稿していただきました。

はじめまして。1学年で英語を担当しているAです。高崎先生より依頼があり、僭越ながら、今度みなさんが鑑賞する「オペラ座の怪人」についてお話ししたいと思います。

元々「オペラ座の怪人」はフランスの作家ガストン・ルルーの怪奇小説ですが、それをイギリスの作曲家アンドリュー・ロイドウェバーが、その妻でソプラノ歌手のサラ・ブライトマンとともに、ラブストーリーの要素も加えたミュージカルを作ることができないか、とアメリカの演出家ハロルド・プリンスに相談し、自ら楽曲を創り、チャールズ・ハート、リチャード・スティルゴーとともに歌詞、脚本を作り、豪華で、悲しくも美しいミュージカルに仕上げたものです。初演は1986年ロンドン、1988年にはアメリカ、ブロードウェイで上演され、以来、世界各地で上演され続け、世界で最も成功したミュージカルの1つです。私は、この伝説のロンドンオリジナルキャスト版(ファントム[怪人]役:マイケル・クロフォード、クリスティン役:サラ・ブライトマン)のCDを持っています。(私の宝物です。)日本では、劇団四季だけが上演権を持っており、オリジナルを忠実に再現し、日本語の脚本で上演しているわけです。オリジナルの英語では、楽曲の短い小節に多くの情報を乗せることができるので、ファントムの悲哀がより詳細に具体的に表現されており、そこが非常に面白いところです。一方、日本語の台詞だと、音楽にあまり情報を乗せられないので、情緒的で漠然としてしまう、という弱点があります。しかし、

ミュージカルはそもそも話の流れを重々わかっていながら、役者の踊りと歌、音楽、舞台芸術を堪能するものなので、ファンならば、その辺は想像力、共感力で補います。その上、私は2000年に1度ロンドンで現地スタッフによる「オペラ座の怪人」を見ていますが、それと比較して日本の劇団四季による「オペラ座の怪人」(私は4回観ています)も決して負けていない、むしろ役柄によれば、微妙な感情表現、歌唱力など、日本人のほうが優れていると感じました。

この悲しくも美しいミュージカルをより一層堪能するために必要な情報をここで披露したいと思います。怪人[ファントム]は優れた音楽の才能を持ちながらも顔の奇形のために母から疎まれ世間からも迫害され、パリのオペラ座の地下深くの迷宮に潜む、孤独な芸術家です。至上の音楽を追求し、自らの審美眼に絶対の自信を持つファントムは、理想とする舞台を実現するためには手段を選びません。影でオペラ座を支配し、時に殺人も厭わない、おそろしく傲慢な怪人、しかしその裏には、醜悪さゆえの美への希求、永遠に孤独であるがゆえの愛への渴望があるのです。このファントムの悲哀、自らの芸術への圧倒的自負、それを一人の歌姫を通して実現し、愛(自分の理解者)を得ようとした儚い夢、孤独な芸術家の魂、その昇華の物語が、美しい舞台セットとアンドリュー・ロイドウェバーの壮麗な音楽で描かれた最高傑作です。いったん劇場に足を踏み入れたならば、できるだけ早く怪人に感情移入し、その世界観に浸りきってください。